

2009 年度 日本海学研究グループ支援事業研究成果報告

日本海域発見碇石による海域間交流の研究

“A Study of Stone Anchor Stocks and Overseas exchanges in the Far East-Japan Sea”

Mitsuhiko OGAWA

金沢大学大学院博士後期課程

小川 光彦

1. 研究の目的

宋・元代を中心に外洋船の木製碇に使用された「碇石」は、発見された海域での船舶の碇泊を直接的に示す考古・歴史資料である。交易・交渉史の傍証的資料として、以前に比べれば僅かに注目されつつあるものの網羅的な資料集成や研究は極限られている。一方、日本海学関連の研究においては、丸木舟・削り舟や近世の北前船等の一部の例を除いて、「船」の実像に迫りうる研究については必ずしも進んでいる分野とは言えない。

当該研究においては、ロシア沿海州と韓国で発見された碇石の現地資料調査を行い、東アジア海域発見の碇石の比較研究を行うことにより、極東-日本海域において中国船あるいは高麗船の船舶の航跡を直接示すことをその目的とする。さらに、東アジア海域史の中での位置付けを行うことにより、極東-日本海海域と黄海～東・南中国海海域に至る海域間交流、海上交通史復元の一助とするものである。

2. 調査の概要

(1) ロシア現地資料調査 (2009年8月20日～27日)

ウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部所蔵の碇石(1点)とアルセーニエフ郷土博物館所蔵の碇石(3点)の資料調査、および渤海時代に対外海上交通の要衝であったクラスキノ城跡とポシエト湾の現地見学を行った。

① ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民俗学研究所所蔵の碇石 (図1、写真1～4)

ロシア沿海州南部のポシエト湾南側に位置するフルゲルム島(Furugelm Island)のセベルナヤ湾(Severnaya Bay)にて発見された碇石である(G.L.Silantyev, 2001)。法量は全長182.5cm、中央部38.0×32.0cm、先端部13.0×15.5 / 13.0×14.0cm、碇身着装部幅18.0(15.0)深さ3.5cm / 幅17.0(15.0)深さ3.0cm、固定溝幅6.5(5.5)深さ3.0cm / 幅7.0(5.5)深さ3.5cm、重量不明。石材は未確認である。保管状態の裏面を除き黒色ペンキが塗布されているが、裏面は灰～灰オリーブ色(5Y6/1.5)の多孔質で空隙が目立つ。

幅狭面の片面の側観は直線状を成すが、もう片面は中央部から1/3までは直線状を成し、両端部に向かって先細りする所謂後退翼状を呈する(図1上、写真2)。幅広面の側観は両端部に向かって同様の比率で先細りする(図1下)。母材から割出した際の敲打痕と成形調整時の小剥離が見られるほか、全面に斜行ノミ痕が散見され、特に裏面においては顕著である。中央部には深さ3cmを超える明瞭な碇身着装部と固定溝の加工が施されることも特徴的である。全面に摩滅が見られるが、特に両端部の摩滅が著しく、比較的使用期間を経過した後に廃棄されたことが窺われる。碇石分類の1B類(角柱非対称型)に該当する。

② アルセーニエフ郷土博物館所蔵の碇石

ファルシヴィ島(Falshivyi Island)付近のシブチャヤ湾(Sivuchaya Bay)の投錨地において、3点の碇石が発見されている(G.L.Silantyev, 2001)。博物館の登録番号順にA・B・Cと仮称した。

i. アルセーニエフ博碇石A(МЛ К17332-10) (図2、写真5中)

全長131.0cm、幅26.0cm、厚さ4.0～7.0cm、重量44kg。石材は未確認であるが、緑灰～暗青灰色(10G5/1～5BG3/1)を呈し、狭い縞文(流理構造?)が顕著である。薄い板状を呈し、展示状態

の裏面の幅広面は平坦面を成すが、表面は母材からの割出し痕と成形調整時の小剥離が顕著である。全面に磨滅が見られ、表裏面の多くに貝類等の付着が見られる。碇石分類の3類（柱状型）に該当する。

ii. アルセーニエフ博碇石 B (MJI K17332-16) (図3、写真5手前)

全長 79.5cm、幅 22.0~26.0cm、厚さ 6.5~8.0cm、椀身装着部幅 9.0(6.0)深さ 0.5~0.75cm、固定溝幅 7.5(5.5)深さ 1.0cm、重量 34 kg。石材は未確認であるが、暗緑灰~緑黒色 (7.5GY2.5/1) を呈し、黒雲母と長軸方向の細かい縞文が顕著である。展示状態の裏面の幅広面は平坦面を成すが、もう片面には明瞭な椀身装着部を施す。また固定溝も片面のみに見られる。全面に磨滅が見られ、特に両端部において顕著である。一部に貝類等の付着有り。碇石分類の2類（柱状不定形）に該当する。

iii. アルセーニエフ博碇石 C (MJI K17332-18) (図4、写真5奥)

全長 78.2cm、幅 11.5~13.0cm、厚さ 4.5~5.5cm、重量 10 kg。石材は未確認であるが、暗緑灰~暗青灰色 (10G~5BG4/3) を呈し光沢あり。蛇紋岩か? 全体に剥離調整が施され細い板状を呈する。固定溝等の加工は無い。全面に磨滅が見られ、一部に貝類等が付着する。碇石分類の3類（柱状型）に該当する。

③碇石に関する考察

資料調査を行った4点のロシア沿海州発見の碇石は、碇石分類の1類・2類・3類にそれぞれ該当するものであり、広義の中国スタイル碇石の範疇に含まれるものである (小川 2008)。ロシア国内においても木碇に使用されたストックとして報告されている (G.L.Silantyev, 2001)。

ロシア科学アカデミー碇石の該当する1B類碇石の確実な例としては、福岡県櫛田神社所在の櫛田2号碇石 (JF19) に次いで2例目である。この碇石は、以前からウラジオストックを訪れた日本人研究者からの情報により、国内でもその存在は知られており、報告者も正面からの写真は拝見していた (Ru01 として登録、パポーバ発見として誤認)。その写真で見ると、両端部に向かって同比率で先細りする1A類のものであると見ていたが、実際には幅狭面の側観が非対称の1B類に該当することが確認された。しかし、60余点を数える1類の角柱定形型碇石の内、僅か2例の1B類の碇石であるが、断面形状の扁平率と石材は大きく異なるものである。櫛田2号は白花崗岩製で中央部の幅と厚さの比率が 1 : 0.68、先端部では 1 : 0.61 であるのに対して、科学アカデミー碇石は多孔質の石材で中央部では 1 : 0.84、先端部ではほぼ 1 : 1 と扁平率はかなり低い。この扁平率の違いは、その碇石の石材の性状に規定される面が大きいと思われるが、或いは年代による違いであるのか地域差によるものであるのか、現在のところその因果関係を明確に示す資料には恵まれていない。しかしながら、扁平率が大きく異なるにも関わらず同様な範型を志向していたであろうことをこの限られた2例が示しているものと言えよう。

アルセーニエフ博碇石 B は、2類の碇石としては小型のものである。しかし、片面づつのみではあるが椀身装着部と固定溝を共に有しており、1類の定形型碇石を範型とした模倣型碇石であることは確かである。椀身装着部のみならず固定溝が確認されることから、比較的小型ではあるが2本の椀身 (シャフト) で挟んで木碇として使用したものと推定される。また、アルセーニエフ博碇石 A・C は椀身装着部等の加工は無いものの、扁平な板状に成形するための加工痕が観取され、さらに碇泊地とされる海域において発見されていることから、碇石として加工されたものであると考えて差し支えないものと思われる。

当初、「アルセーニエフ博物館の碇石は形状が平たいものである。」と聞いていたため、韓国十二東波島沈船出土の高麗時代初期の碇石 (国立海洋遺物展示館 2005) との関連性を想定していたが、実見したところ残念ながら石材・形状ともに異なるものであり、初期高麗時代の黄海と沿海州を碇石から見た航跡で直接結ぶことは出来なかった。しかし、これら4点の碇石が発見されたのは、現在のロシア沿海州最南部のポシエト湾口付近の海域である。ポシエト湾奥のエクスペディヤ湾には渤海時代に対外海上交通の要衝であったクラスキノ城跡が置かれている。こうした海域で、外洋船に使用されたと考えられる1類の大型碇石と沿岸海域や湾内・河川を航行したと思われる中・小型碇石が確認さ

れたことは沿海州の海上交通史を考える上で非常に興味深いことであり、今後さらに事例の追加があるものと予想される。しかしながら、現状では石材とその産地を同定できないため、これらの碇石から航跡を結ぶまでには不十分である。碇石の形態比較研究と合わせて石材産地の比較研究を行うことは、今後の必須課題である。

(2) 朝鮮通信使資料館の資料調査 (2010年3月28日～30日)

3月下旬に韓国全羅南道の国立海洋文化財研究所にて、務安郡多慶鎮海底遺跡発見碇石の資料調査を行う予定であったが、一身上の理由で渡航が困難となったため、韓半島における木製碇の変遷に関連ある朝鮮通信使の絵画資料調査を行うこととし、広島県呉市下蒲刈町の「朝鮮通信資料館」所蔵の木碇関連絵画資料調査および同市倉科町所在の「倉科歴史民俗資料館」と「長門の造船歴史館」の見学を行った。

①朝鮮通信使資料館(御馳走一番館)所蔵の絵画資料

同館所蔵の『朝鮮通信使大坂河口之図屏風』と『朝鮮人來朝覺備前御馳走船行烈図』(複製)の資料調査を行った。

i. 『朝鮮通信使大坂河口之図屏風』(写真6・7)

作者・制作年不詳であるが、瀬戸内海を通過し大坂の淀川河口に碇泊中の通信使船1隻と周囲を取り囲む小型の和船6艘が詳細に描かれている。通信使船は船首付近に巻揚機である轆轤を配し、船首に1基の木碇があり、2本の碇歯と1本の碇身・碇棹で構成されて、その碇索は轆轤に巻かれている。また、右舷側斜め前方には海面に向かって直線的に入り込む索が描かれていることから、もう1基の碇は既に投錨されている状態である。轆轤横の水夫が轆轤に手を掛けて屋形の屋根に上った物見役と掛け合っていることから、2基目の碇を投錨するタイミングを計っているところであろうか。

ii. 『朝鮮人來朝覺備前御馳走船行烈図』(写真8～10)

延享5(寛延元)年(1748)に備前沖の鞆の浦から牛窓にかけて進む第10次通信使の通信使船6隻を始めとする約300艘の船団を描いた四宮家旧蔵の全長824.9cmの卷子である。副使官ト船1隻は対馬で消失したため日本船を代用しており、実質5隻の通信使船の内4隻の船首に木碇が確認される。正使官ト船・副使官船・従事官船の3隻の木碇は轆轤に碇身端尾部まで巻揚げられた状態が確認され、副使官船と従事官船の木碇には、碇身に取り付けられた細い1本の碇棹が確認される。

②倉橋歴史民俗資料館、長門の造船歴史館の展示資料

i. 倉橋歴史民俗資料館(写真11)

民俗資料展示室で両爪の「木碇」を確認した。保存状態は良好であり、碇歯(アーム)端部の爪(ネイル)部分と先端(クラウン)部分にのみ僅かな擦痕が確認されることから極短期間の使用が推定される。ストック部分は取り外されているが、差込みの穴は確認される。「レ」字状で全長30～50cm程度の片爪の小型木製碇は時折目にはあるが、全長5～6尺と推定される両爪の木製碇の民俗資料は初見である。収蔵に至る詳細は不明のようであるが、呉市倉橋島の鹿島において使用されていたもので、数十年前には既に収蔵されていたとのことである。

ii. 長門の造船歴史館(写真12)

船の復元展示と和船の造船技術に関する展示が中心であり、遣唐使船に使用されていた木製碇の復元展示を確認した。同館の遣唐使船は『吉備大臣入唐絵詞』と13世紀頃の中国船の出土資料等を参考資料としているようであり、木碇も絵巻に見られる和船のものを参考にしているようである。しかし、円柱状の石製ストック(碇石)を使用し、2本の「レ」字状の木製部位で挟む復元は根拠が薄い。宋～元代の中国船の木碇は2本の碇身で角柱状の精緻に成形された碇石を挟み、2本の碇歯を取り付けている。同館の復元展示は、木の幹と枝の部分を2セット使用する和船の中・小型の木碇と、加工された石製ストックを使用する中国船の大型木碇と、ストックとしての碇石が消失し単純な木製(あるいは鉄製)ストックに移行した後の木碇の3スタイルの木碇の折衷案であると思われる。

③朝鮮通信使船の木碇に関する考察

今回確認した絵画資料に見る通信使船の木碇は、何れも1本の碇身に1本の細いストックを艤装しているが、金在瑾氏による復元通信使船では碇身に挿したストックの支えとして2本の碇櫓も艤装されている。このストックを支える2本の碇櫓を使用する例としては、南波松太郎氏所蔵の『朝鮮通信使船図』（金 1995）や松浦史料博物館所蔵『外国船具図』所載の18世紀前葉頃に描かれた中国船の「木碇」図でも見られるが、いずれにせよ碇石を使用しない木碇の存在が確認される。一方、江戸時代に朝鮮語のテキストとして使用されたとされる『漂民対話』（沈壽官家本）には、日本領内に漂流した朝鮮漁民から聞き取りした木碇と碇石が描かれており、近世に至っても碇石が使用されていたことが確認される。この木碇の違いは、通信使船という国家の公的な船舶と漁船という民間の船舶との違いに起因するものであるか、今後さらに検討が必要である。

謝辞 ウラジオストックの現地資料調査においては金沢学院大学文化財学科の小嶋芳孝先生、ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民俗学研究所博物館館長のニキーチン・ユーリ・ゲンナヂェヴィチ氏、極東国立大学のポストヴォイト・エフゲニ氏、アルセーニエフ郷土博物館のキエルチェアライェバ・ニーナ・ビスラーナブナ女史、スッポーチン・アレクサンダ・ニコライヴィチ氏より、また朝鮮通信使資料館では蘭島文化振興財団の花岡拓郎氏より多大なご協力・ご指導を賜った。末筆ながら記して謝意を表します。

<参考文献>

- 金 在瑾 1995 「朝鮮通信使船 調査報告」『朝鮮通信使船とその旅』ふるさと下蒲刈 21、下蒲刈町文化財保護委員会。
- G.L.Silantyev. 2001. "Sea routes of Bohai and Jurchen of VIII-XIIIc. in the South of Russian far east." *Eastern Asia in Prehistory and Middle ages*. Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of the Far Eastern Branch of the Russian Academy of Sciences. pp.217-238. Vladivostok.
- 財団法人蘭島文化振興財団 2004 『朝鮮通信使の道のり展～交流の足跡～』。
- 国立海洋遺物展示館 2005 「群山十二東波島海底遺蹟」『国立海洋遺物展示館 学術叢書』8。
- 財団法人蘭島文化振興財団 2006 『朝鮮通信使の来日と文化の交流展』。
- 小川光彦 2008 「東アジア海域における中国スタイル碇石の研究」『第1回韓・日共同水中考古学研究発表会論文集』財団法人韓国文物研究院、pp105-145。

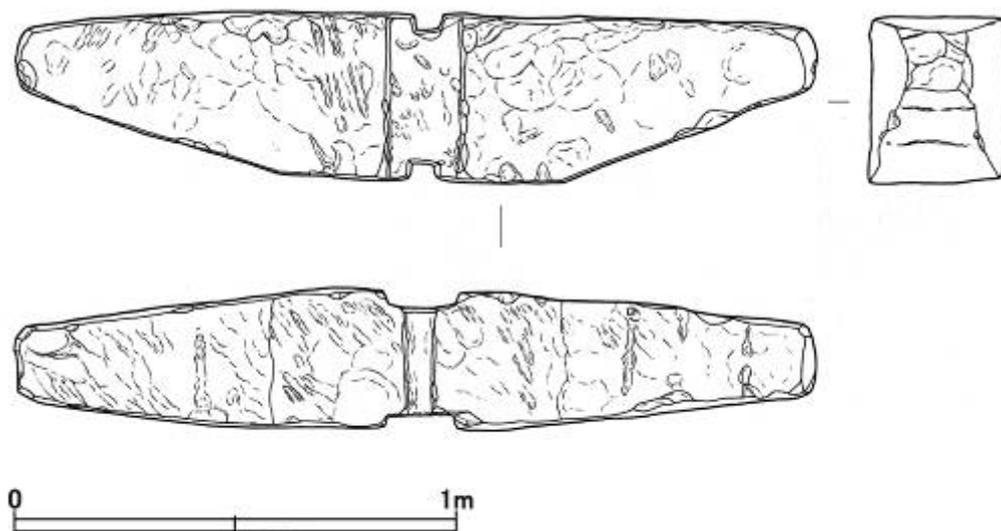


図1 ロシア沿海州フルゲルム島 (Furugelm Island) セベルナヤ湾 (Severnaya Bay) 発見の碇石
(ロシア科学アカデミー極東支部 歴史学考古学民俗学研究所博物館所蔵)



写真1 ロシア科学アカデミー所蔵碇石



写真2 同碇石 (幅広面)



写真3 同碇石 (側面)



写真4 同碇石 (幅狭面・幅広面)

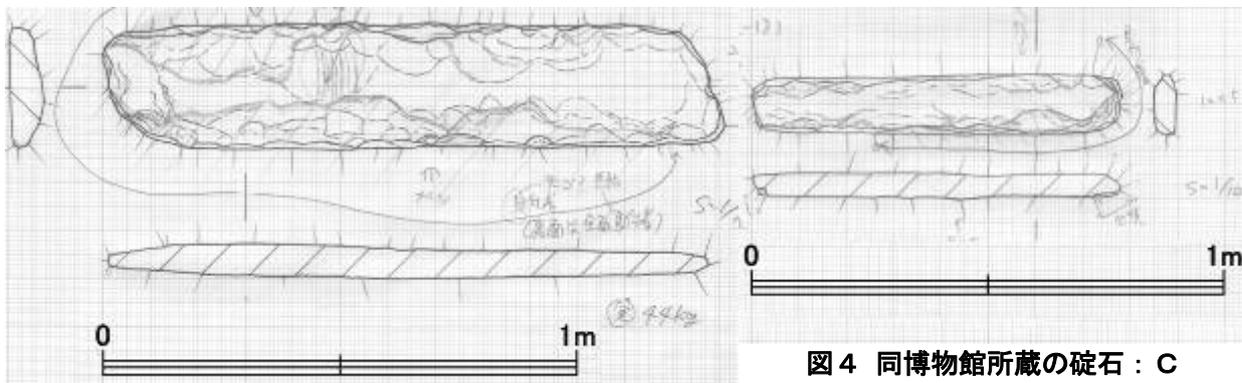


図2 アルセーニエフ郷土博物館所蔵の碇石 : A

図4 同博物館所蔵の碇石 : C

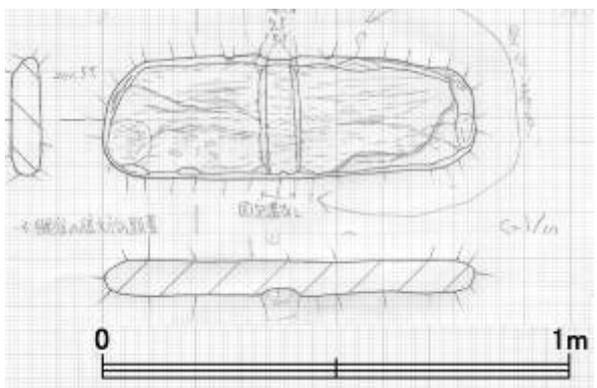


図3 同博物館所蔵の碇石 : B



写真5 アルセーニエフ博物館所蔵の碇石 : A・B・C



写真6 『朝鮮通信使大坂河口之図屏風』
(朝鮮通信使資料館所蔵)



写真7 同図屏風の「木碇と轆轤」



写真8 『朝鮮人来朝覚備前御馳走船行烈図』(複製)の一部 (朝鮮通信使資料館所蔵)



写真9 同行烈図の「正使官ト船の木碇と轆轤」

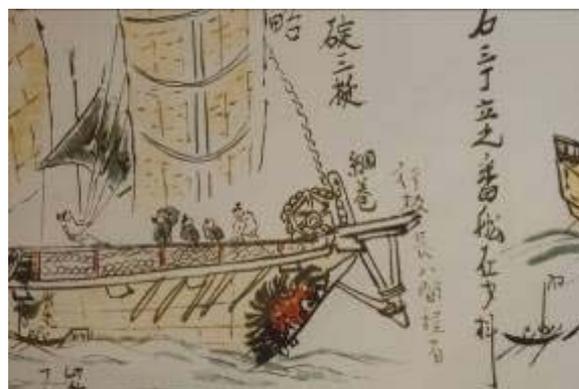


写真10 同行烈図の「従事官船の木碇と轆轤」



写真 11 広島県呉市倉橋島の木碇
(倉橋歴史民俗資料館蔵)



写真 12 復元遣唐使船の復元木碇
(長門の造船歴史館蔵)